

「折々のことば」から学ぶ

朝日新聞朝刊のトップページのコラムは鷲田清一氏の「折々のことば」である。とても有名な方であるので紹介するまでもない人です。12年前、孫娘が高校入試の受験準備で購入した国語の問題で頻繁に出てくることで氏の文章に接し感銘を受けたことを思い出します。臨床哲学を提唱されておられる方で、医療や介護の現場で実際に患者さんに接し診察や治療を行う臨床の場に哲学の思考を繋いでいるということです。哲学とは一言で言えば「問題を根源から、根元において考える学問」となりますが、「折々のことば」を通じて

私が感じることはつづまやかな文章で、読者を深く沈潜に導いて、読者各自が生活の中で何かに気づくことへの橋をかけられているということ。それも、ほぼ毎日（今は土日はお休み）言葉の持つ力を練り込んで幅広い知識を発信し読者の知恵への転換を目指しておられるように思う。記事の構成は40文字程度の他人の著作のフレーズを紹介して、160文字程度で氏の解説がある。時々はその原著を読みたくないのである。上の記事を私の理解のために組み直して読んでみました。



(1)見出しのフレーズ

「祝福とは、幸福と不幸、正しさと誤り、肯定と否定を超えた、
根元的イエスのことだろう。」

これは杉田俊介著『糖尿病の哲学』からの引用である。

このフレーズに対して鷲田氏が次のように解説している。

「祝福とは、誰かがこれまで精一杯生きてきて、間違いも含めて日々のそうした小さな積み重ねの突端にその人の『今』があることの肯定である。人の障害には『そこそこの正し

さ』があればよく、『完璧』を鏡に自分を責めたり追い詰めたりすることはない。杉田氏は自身も闘病生活を潜り抜けてこられた言葉である。 2025年3月3日

『糖尿病の哲学』の著作と「臨床哲学者」の短い解説をじっくり読み込んでいく、読者は自分との結びつきはどうなるのかを考えさせられる。百様の理解の仕方がある、それで良いのであが、祝福とはどういう意味なのかをまず考えずにはおかないだろう。真に深い根元に誘われる。

(2) 2月28日のコラム

「私も自分の限界を静かに見きわめつつ、つつましく低い姿勢で余生を送ることを心がけたいと思います。」（岡本文弥著『芸渡世』）

老いて動作がだんだんと落ち着き、「たよりがあり味わい深く」見えてくるのと同じで、芸も「控え目」、「外へよりも内へと」心がけるようになったという。だから、若い頃に使ってウケた節回しも歳を重ね身震いするほどイヤになることもあると。

「つづまやかな」生き方を尊びたいと。

鷺田清一さんの博学の解説で、一昔なら私は『芸渡世』を読み、冒頭の文章がどこにあるかを探したことだろうと思う。「つづまやかな」の単語は冒頭のフレーズにはない。

「つづまやかな」という言葉は夏目漱石の「虞美人草」の一節に一度だけ出てくる言葉だと私は思っているが、その意味を調べてみた。漢字では「約まやかな」と書き、意味は「簡素で要を得ているさま・控えめで質素なさま・慎ましいさま」とある。

短文はあまり言葉にこだわることは控えなくてはならないが、凝縮した中に深い意味が隠されているかもしれないと思って辞書をひく。これも読書の楽しみなのである。

(3) 3月7日のコラム

「^{サイド}側の発想は、複数の文化が争点となるところでは問題がありすぎる。」

エドワード・W・サイード著『知識人とは何か』

普遍への希求はなく、自らに批判的な距離もとれずに、あっちとこっちとどちら側が善かと問う教条的思考が、ギブ・アンド・テイクの社会過程に浸透すると、いずれ民族の殲滅にまで行き着くと。そもそも防水包装された商品のように同質的で内に完結した文化などあり得ないと。1993年、米国のパレスチナ批評家は語った。

私にとっては非常に難しい行間が読めない文章である。読み手にある程度の知識が求められる内容であるが、具体的に表現できないこと、すこぶる現実的なことを警告しているように感じられる。^{サイド}側の発想とは主体性に欠けるという意味であろうか。

今、私はエマニュエル・ドット著「西洋の敗北」を読んでいる途中であるが、その文脈から見えてくることがある。しかし、言葉にすることはできない。

何も感じないのも感性。感動するものにもいつか出会える

友人

下校中、友人が突然「住宅街って風情があるよね。」と言出し。似寄った建物の中に、多様な人生があることに趣を感じたらしい。同じ風景を見ていたにもかかわらず、私には一切の情感も沸かなかつた。私は思わず、自分の乏しい感性への落胆と、彼女の豊かな感性への羨望を言葉にしていた。すると友人は「何も感じないのも感性だと思う。感動するものにもいつか出会えるはずだよ。」と一言。自分を肯定できる気がした。

以来私は、周囲との感性の違いを感じたとき、友人のこの言葉を出すようにしている。そして感動している人は何に感動しているのかを考える。心動かされるものとの出会いを逃さぬように。

三つのコラムを紹介しました。この鷺田清一氏の連載は3月7日で3,355回になっています。中高生を対象にした「私の折々のことばコンテスト」が10年前から開催されており応募数は25,000から30,000人に及んでいる。直近の入賞作の中に「人生はアイスクリームのように急いでなめると頭が痛むよ」(高校一年生)等、鋭い感性のものが多い。

もう一つ入賞作をご紹介します。

「何も感じないのも感性・感動するものにもいつか出会える」既にこの人は感動することに沢山出会っていると後日談がありました。すごい発想で感性論哲学派の人が聞いたらどんなにか喜ぶでしょう。

パリ通信・第150号

カラヴァッジョ「エジプトへの逃避途上の休息」

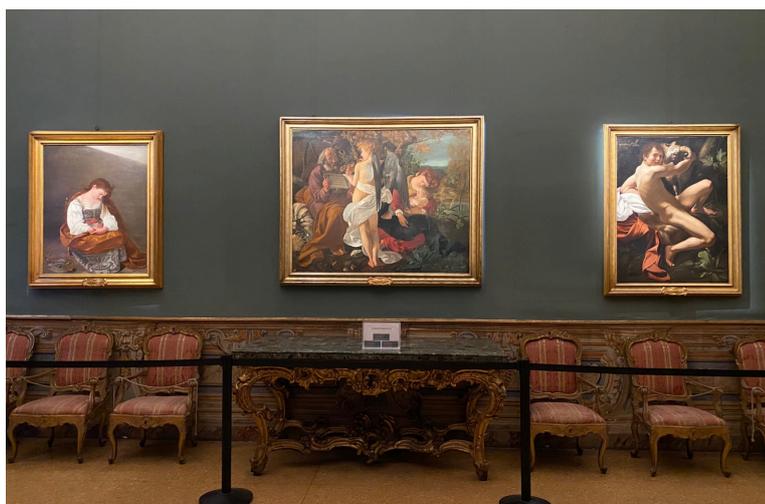
3月は日本の学年末、学生には春休み、海外研修の時期だ。私がサポートしている語学学校や大学では2週間の海外語学研修旅行を実施している。ヨーロッパはイギリスが主流で、私はフランスとイタリアを希望する学生の現地滞在を手伝っている。コロナ禍以前は毎年10人を超える学生が集まり、日本から引率の先生が同行されていたが、コロナ禍、ウクライナ戦争、インフレ、円安ユーロ高の影響で2週間のヨーロッパ滞在は高額になり過ぎて厳しい状況だ。2週間は1週間に短縮せざるを得ず、引率の先生も同行せず、私が空港からホームステイ先の送迎、語学研修と課外活動サポートを担当している。

フランスはパリ、イタリアはミラノとローマ、2名の女子学生をローマの語学学校まで送迎した。語学学校



はバロック芸術の巨匠ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ(1598-1680)の噴水があるナヴォーナ広場近くで、時間が許す限りでカラヴァッジョの作品を見ることが出来た。中でも感慨深かったのが「エジプトへの逃避途上の休息」である。

「エジプトへの逃避途上の休息」はドーリア・パンフィーリ美術館に所蔵されている。ヴェネツィア広場に近いこの美術館は名前の通りジェノヴァの旧家ドーリア家と法皇インノケンティウス10世(1644年法皇に選出)を出したローマのパンフィーリ家との婚姻による家系の住まいが今日の美術館になっている。1944年にはローマ市長を排出するなど、今日も続くローマの由緒ある家系だ。



カラヴァッジョの作品を4点所蔵していたが、1点「女占い師」(1594-1595)は1665年フランス王ルイ14世に寄贈され、今日のルーブル美術館にある。残る3点「エジプトへの逃避途上の休息」「悔悛するマグダラのマリア」「洗礼者聖ヨハネ」は、豪華絢爛な鏡の回廊に続く部屋に3点並べて展示されている。

「エジプトへの逃避途上の休息」がいつ誰の注文で描かれたかは明確ではないが、「悔悛するマグダラのマリア」と一緒に1595-1597年の間の制作されたと考えられている。135,7 x 166,5 cmのこの一枚はこれまでの宗教画とは全く異なる大胆で斬新な作品である。

「エジプトへの逃避途上の休息」は新約聖書「マタイによる福音書」にあるエピソードで、イエスの誕生を知ったヘロデ王が2歳以下の男子を殺害する「嬰兒虐殺」を命じる。ヨセフの夢に現れた天使がマリアと幼子イエスを連れてエジプトに逃れるよう告げる。パドヴァ(スクロヴェーニ礼拝堂)にあるジョット(1267頃-1337)の作品のようにイエスを抱くマリアがロバに乗って、ヨセフがその手綱を引く図が多い。

カラヴァッジョは背中から描いた天使を中央に大きく配し、左と右の対照的な構図を取って



る。その天使はヨセフが持った楽譜(聖書の言葉を歌詞にして合唱するモテット)をヴァイオリンで弾いている。ヨセフの後ろには大きな澄んだ眼を見開いたロバがいる。ヨセフの脇に置かれた穀物の袋と水筒、地面に転がる石は地上の世界を表現している。それに対して画面右は美しい草花が咲き、清らかな水が流れ、マリアとイエスが穏やかに休息する天国の風景である。楽譜はアントワープの教会音楽作曲家ノエル・ボルドウィン(1480-1530)の合唱曲で夫と妻(ここではヨセフとマリア)、さらには聖母子(マリアと幼子イエス)を讃える詩歌である。ヨセフとイエスの裸足はきちんと重ね合わせられ、地上の汚れを浄められているかのようだ。



二十歳でミラノからローマに来たカラヴァッジョの若い感性を知る一枚だ。傲慢な性格で絶えず 暴力と背中合わせに生きた短い38年の実生活を考えると「エジプトへの逃避途上の休息」

は想像し難い美しさだと思う。音楽を奏でる天使が地上と天国を結び、描かれた人物を通して心を浄められる気がする。1599年枢機卿デル・モンテの依頼でナヴォーナ広場側「サン・ルイジ・デイ・フランチェージ教会」のコンタレリ礼拝堂に描いた「聖マタイの召命」はカラヴァッジョの出世作で以後多くの宗教画

を描くが、「エジプトへの逃避途上の休息」以後自然の風景が描かれることはなく、人物やエピソードのドラマ性だけが強く表に出るようになる。ミラノで培ったロンバルディア絵画の美しい風景は、権力と富、貧困、混沌とした活気に溢れるローマの街に来たカラヴァッジョの心から遠くなったのだろう。(古賀順子記)

参考 スクロヴェーニ礼拝堂にあるジョットの「エジプトへ逃避行途上」

